Rendez-Vous Otsuka South & North

『Rendez-Vous Otsuka South & North』

コンセプト・振付：ファビアン・プリオヴィル
出演：近藤みどり、田中朝子、中川 賢、吉﨑裕哉
音楽：UZAWA
リハーサル・ディレクター：瀬山亜津咲
撮影・編集：株式会社Global Japan Corporation
制作：柚木桃香、金井美希

マネージャー：アレクサンドラ・シュミット
製作：ファビアン・プリオヴィル・ダンス・カンパニー

ファビアン・プリオヴィル・ダンス・カンパニーは、
ノルトライン=ヴェストファーレン州芸術科学省の助成を受けています。

宣伝美術：TAICHI ABE DESIGN INC.
記録映像・記録写真：宮澤 響(Alloposidae LLC)

特別協力：南大塚ネットワーク、一般社団法人みんなのトランパル大塚、
星野リゾート　OMO5東京大塚
主催：フェスティバル/トーキョー

"Rendez-Vous Otsuka South & North"

Conceived and Choreogrphed by Fabien Prioville
Performers: Midori Kondo, Asako Tanaka, Satoshi Nakagawa, Yuya Yoshizaki
Music: UZAWA
Rehearsal Director: Azusa Seyama
Filming & Editing: Global Japan Corporation
Production Coordinators: Momoka Yunoki, Miki Kanai

Production Manager: Alexandra Schmidt
A fabien prioville dance company production:
The fabien prioville dance company is funded
by the Ministry for the Arts and Science North Rhine Westphalia.

Design: TAICHI ABE DESIGN INC.
Photography & Video: Hibiki Miyazawa (Alloposidae LLC)

In special cooperation with Minami-Otsuka Network, Minna no TRAMPAL Otsuka,
Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka
Presented by Festival/Tokyo

星野リゾート　OMO5東京大塚

ブランドコンセプトは寝るだけでは終わらせない、旅のテンションを上げる都市観光ホテル。旅先をまるごと楽しむディープなご近所の魅力と、お茶目な仕掛け満載のホテルステイが、旅のテンションを盛り上げます。

星野リゾート OMO5 東京大塚

住所●東京都豊島区北大塚2-26-1
ウェブサイト●https://omo-hotels.com/otsuka/

フェスティバル/トーキョー20

会期	令和2(2020)年10月16日(金) ― 11月15日(日)
会場	東京芸術劇場/トランパル大塚/豊島区内商店街/F/T remote(オンライン会場)ほか

フェスティバル/トーキョー実行委員会

顧問	野村 萬　(公社) 日本芸能実演家団体協議会会長　能楽師
名誉実行委員長	高野之夫　豊島区長
実行委員長	福地茂雄　(公財) 新国立劇場運営財団　顧問 (公社) 企業メセナ協議会　顧問 アサヒグループホールディングス株式会社　社友
副実行委員長	市村作知雄　NPO 法人アートネットワーク・ジャパン顧問 藤田 力　豊島区文化商工部長 小澤 弘一　(公財) としま未来文化財団　事務局長
委員	尾崎元規　(公社) 企業メセナ協議会　理事長 花王株式会社 顧問 熊倉純子　東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授 中田雅史　アサヒグループホールディングス株式会社 日本民話本部 事業企画部 理事 渡邊裕之　東京商工会議所豊島支部 会長 永井多恵子　(公財) せたがや文化財団 理事長 小倉 祐　豊島区文化商工部文化デザイン課長 蓬池奈緒子　(公財) としま未来文化財団 あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター) 支配人 米原晶子　NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 長島 確　フェスティバル/トーキョー　ディレクター 河合千佳　フェスティバル/トーキョー　共同ディレクター 葦原円花　フェスティバル/トーキョー　事務局長
監事	能登耕子　豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨重通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

ディレクター	長島 確
共同ディレクター	河合千佳
事務局長	葦原円花
制作	藤島麻希、嶋田歌介、柚木桃香、鈴木千尋、藤井友理、長田崇史、山縣昌雄、 猿狩裕子、岩間麻衣子、植松侑子(合同会社syuz'gen)、金井美希、可田由幸、 麻谷早枝子、宮内芽依、宮武南季、宮本晶子(合同会社syuz'gen)
コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)チーフ	小倉明紀子
コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)	名取萌音、岡野乃里子、細川浩伸
コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)アシスタント	森川清成、植田あす美
票券チーフ	武井和美
渉外	太田志保
経理	堤 久美子 五藤 真、中山恭一(株式会社countroom)
総務	米原晶子
技術監督	資川英司
照明コーディネート	木下尚己(株式会社ファクター)
音響コーディネート	相川 晶(有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション	高田 唯(Allright Graphics)
デザインコーディネーター	北條 舞(Allright Graphics)
デザイン	齊藤拓実(Allright Graphics)
イラスト	芳賀あきな
音楽(PR動画)	東郷清丸(Allright Music)
PR動画	ダイノサトウ
ウェブサイト	相澤 俊(Mtame株式会社)
海外広報・翻訳	ウィリアム・アンドリューズ
作品紹介文	鈴木理映子
主催	フェスティバル/トーキョー実行委員会 豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/NPO法人アートネットワーク・ジャパン、 東京芸術祭実行委員会(豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団(東京芸術劇場・アーツカウンシル東京))
「トランスフィールド from アジア」助成	国際交流基金アジアセンター/アジア・文化創造協働助成
後援	外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM
特別協力	西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、サンシャインシティ、 ジュンク堂書店 池袋本店、理想科学工業株式会社、星野リゾート　OMO5東京大塚
協力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、 一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、 池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人ビファー池袋まちづくり、 ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ池袋ホテル会、 サンシャインシティプリンスホテル、ホテルリソル池袋
宣伝協力	株式会社ポスターハリス・カンパニー

令和2年度 文化庁 国際文化芸術発信拠点形成事業

フェスティバル/トーキョー20は東京芸術祭2020の一環として開催いたします

Festival/Tokyo 2020

Dates
Friday, October 16–Sunday, November 15, 2020

Venues
Tokyo Metropolitan Theatre, TRAM-PAL Otsuka, shopping streets in Toshima, online, and other locations

Festival/Tokyo Executive Committee

Advisor:
Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor)

Honorary President of the Executive Committee:
Yukio Takano (Mayor of Toshima City)

Chair of the Executive Committee:
Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation; Advisor, Association for Corporate Support of the Arts; Senior Alumnus, Asahi Group Holdings, Ltd)

Vice Chairs of the Executive Committee:
Sachio Ichimura (Director, NPO Arts Network Japan)
Chikara Fujita (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City)
Koichi Ozawa (Administrative Director, Toshima Mirai Cultural Foundation)

Committee Members:
Motaki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation)
Sumiko Kumakura (Professor, Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts)
Masashi Nakata (Senior Officer, Business Planning Department, Japan Headquarters, Asahi Group Holdings, Ltd)
Hiroyuki Watanabe (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima)
Taeko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation)
Kei Ogura (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City)
Naoko Hasuike (Toshima Mirai Cultural Foundation; Executive Director, Owlspot Theatre/Toshima Performing Arts Center)
Akiko Yonehara (Representative, NPO Arts Network Japan)
Kaku Nagashima (Director, Festival/Tokyo)
Chika Kawai (Co-Director, Festival/Tokyo)
Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo)

Supervisor:
Kimiko Noto (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City)
Legal Advisors:
Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat

Director: Kaku Nagashima
Co-Director: Chika Kawai
Administrative Director: Madoka Ashihara
Production Coordinators: Maki Fujishima, Keisuke Shimada, Momoka Yunoki, Chihiro Suzuki,Yuuri Fujii, Takashi Osada, Masao Yamagata, Yuko Igari, Maiko Iwama, Yuko Uematsu (syuz'gen), Miki Kanai, Yoshiyuki Shida, Saeko Hagiya, Mei Miyauchi, Aki Miyatake, Shoko Miyamoto (syuz'gen)
Communication Design Director (PR,Education & Outreach): Akiko Ogura
Communication Design (PR, Education & Outreach): Mone Natori, Noriko Okano, Hironobu Hosokawa
Communication Design Assistants (PR, Education & Outreach): Kiyonari Morikawa, Asumi Ueda
Ticket Manager: Kazumi Takei
Liaison Officer: Shiho Ota
Accounting: Kumiko Tsutsumi, countroom (Makoto Gotoh, Kyoichi Nakayama)
Administrator: Akiko Yonehara

Technical Director: Eiji Torakawa
Lighting Coordinator: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
Sound Coordinator: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Director: Yui Takada (Allright Graphics)
Design: Takumi Saito (Allright Graphics)
Design Coordinator: Mai Hojo (Allright Graphics)
Illustrator: Akina Haga
PR Video Music: Kiyomaru Togo (Allright Music)
Publicity Video: Dino Sato
Website: Shun Aizawa (Mtame, Inc.)
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Copywriting: Rieko Suzuki

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ]), Tokyo Festival Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, Festival/Tokyo Executive Committee, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture [Tokyo Metropolitan Theatre & Arts Council Tokyo])

"Transfield from Asia"Grant:
The Japan Foundation Asia Center Grant Program for Promotion of Cultural Collaboration

Endorsed by the Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, J-WAVE 81.3 FM Special cooperation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City, Junkudo Ikebukuro, RISO KAGAKU CORPORATION, Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka

In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporate Taxpayers' Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo Ikebukuro, Hotel Grand City Ikebukuro, Ikebukuro Hotel Association, Sunshine City Prince Hotel, HOTEL RESOL IKEBUKURO

PR Support: Poster Hari's

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2020

Festival/Tokyo 2020 is organized as part of Tokyo Festival 2020.

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会　〒171-0031東京都豊島区目白5-24-12 旧高和中学校4F　TEL: 03-5961-5202　FAX: 03-5961-5207　https://www.festival-tokyo.jp/20.html
編集：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局　編集協力：鈴木理映子　アートディレクション：高田 唯(Allright Graphics)　デザイン：山田智英(Allright Graphics)

本プログラムへのアンケートにご協力をお願いします。
アンケートフォームはこちら→

ファビアン・プリオヴィル・ダンス・カンパニー

Rendez-Vous Otsuka South & North
（ランデヴー・オオツカ サウス アンド ノース）

コンセプト・振付：ファビアン・プリオヴィル

fabien prioville dance company
Rendez-Vous Otsuka South & North

Conceived and Choreographed by Fabien Prioville

10.17 Sat－11.12 Thu
トランパル大塚、
星野リゾート　OMO5東京大塚 4階 OMOベース
TRAM-PAL Otsuka,
Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka 4F OMO Base

フェスティバル / トーキョー 20 主催プログラム
FESTIVAL / TOKYO

リアリティとの戯れ
——ファビアン・プリオヴィルの世界

武藤大祐／ダンス批評家・群馬県立女子大学文学部准教授（舞踊学・美学）・振付家

ファビアン・プリオヴィルといえば、2008年に群馬県高崎市でバレエ・スタジオの女子高校生たちと作った『紙ひこうき』が今なお記憶に新しい。日本の高校生が日々経験しているささやかな喜びや悩み、そして陰の部分にまで見事に光を当てたこの作品は、地元のみならず東京やドイツでも繰り返し上演され、多くの観客を得た。具象と抽象のあわいを捉えるピナ・バウシュ直伝ともいうべきダンスシアターの手法と、高校生たちによる等身大の表現が相まって、類を見ないリアルな作品に仕上がっていた。

その後も自身のカンパニー公演など日本での活動も精力的に展開しているプリオヴィルだが、アーティストとしての彼の関心には大きく二つの軸があるように見える。すなわち、『紙ひこうき』のように地域性に焦点をあてた作品と、デジタル・テクノロジーを取り入れた実験的な作品である。両者は一見かけ離れているようにも思えるが、今回F／Tで上演される『RENDEZ-VOUS』ではこの二つの軸が結合している。特定の場所での上演のために構築された「サイト・スペシフィック」な作品でありながら、360度を完全に取り囲む「バーチャル・リアリティ（＝仮想現実、VR）」の映像技術によって、観客はその場に身を置きつつ非現実の時空間を体験するのである。このユニークな形態についてプリオヴィルに聞いてみた。

✦

「最初のアイディアは、公共空間でのインスタレーションだったんだ。駅とか商店街のような、大勢の人が行きかう賑やかな場所にVRブースを設置し、観客にヘッドセットを付けてもらって、そこが完全に無人になった状態を見せたいと考えた。何もかも一時的に停止して自分一人しかいないような、普通はあり得ないパラレルワールド。少しの間そこに座り、あわただしい日常から距離をとって、好きなことを考えたり、ぼんやり過ごしてみてほしいと思った。でも自分は振付家だから、そこにいきなりダンサーたちが飛び出して来て観客をパフォーマンスに巻き込んでしまうというのはどうだろう……こんな風に、メディア・アート的な発想と振付を組み合わせてみた」

この作品は2018年にデュッセルドルフで発表されて以来、場所に応じて内容を変えながら制作されてきた。今回の東京版は実に11回目の上演だという。

「場所は単なる背景ではなく、一種の「物語」だ。観客の中に、その場所に対する新しい見方が作り出せていたら嬉しい。周りにある物も違って見えるだろう。身体、インスタレーション、空間、ダンスの間にある作品なんだ。振付と空間が一体になるよう意識している」

地域の人たちとのコラボレーションも重要な側面だ。高崎で作った『紙ひこうき』が示したように、プリオヴィルにはローカリティへの深い共感がある。

「ただ空間を使うのではなく、普段その場所がどのように使われ、どのように機能しているのかが大事だ。例えば大塚の広場（トランパル大塚）の場合、毎朝そこでラジオ体操をするお年寄りのグループがいる。彼らはその場所を約20年前から自分たちで手入れしてきた。彼らが作った場所といってもいいほどで、広場の管理を役所に申し出たらしい。だから単に空間を借りるのではなく、彼らの気持ちを作品に取り入れたいと思ったんだ」

この皆さんは作品にも出演している。

「現場での作業の中から出てきたアイディアだ。朝、彼らがラジオ体操をしているのを見て、どうしたらこの要素を作品に取り入れられるか考えた。あまり長時間付き合ってもらうわけにもいかないし、調整に苦労したけど、面白いチャレンジが好きだからね。作品のコンセプトはとてもシンプルだから、あとはそれでかなり自由に遊べるんだ」

✦

ローカルな日常生活への関心と、VRなどテクノロジーへの関心。この二つは彼の中でどんな風につながっているのか。

「要するに、パフォーマンスを成り立たせるメカニズムに興味があるんだろう。どんなパフォーマンスを作れるか、どんなインタラクティブな仕掛けを作れるか、それを考えること自体が面白い。新しいコンセプトを作って、テクノロジーと、振付やダンスをぶつけ合わせている。数年前にスマートフォンを使った作品を作ったけど、その時はスマートフォンの技術が世界にどんな変化を起こしたか、人と人の関わりをどう変えたかを考えた。振付家として、こういうことを語る責任があると思っている。身のまわりの世界から刺激を受けるし、実際に起きている出来事を語るのが好きだ」

プリオヴィルの語り口は終始穏やかで控えめなのだが、新しいことを試すこと自体が楽しくて仕方ない、まるで子供のような衝動や好奇心のざわめきが言葉の端々から伝わってくる。

「テクノロジーは良いとか、悪いとか、そういうコメントがしたいわけじゃない。単純に、テクノロジーがぼくたちの日常に深く入り込んでいるから、そういうツールを使った創作をいつも探している」

かつてピナ・バウシュのような振付家は人間の身体やコミュニケーションを主題にしたわけだが、今日テクノロジーは完全に我々の一部になっている。だからテクノロジーを振付に取り入れるのは当然というわけだ。

「今回のコロナ禍で、アーティストたちは生き延びるためにデジタル技術と向き合わざるを得なくなっている。自分は前からスカイプを使った作品なども作ってきたから、こういう変化もわりと楽しめているけど……。確かに従来の舞台芸術の世界は閉鎖されている。でもVRのようなテクノロジーを使えば建築物としての劇場を離れ、舞台も照明も小道具も関係ないところへ自分のダンスを連れ出せるだろう。テクノロジーは新しい空間を探究させてくれる。いわゆるデジタル空間だけじゃなく、物理空間も含めてね。テクノロジー自体が、新しい舞台表現、劇場、言語になりつつあると思う。今は何もかもZOOMを使って進めなくちゃならないし、動画配信も当たり前になったけど、でも振付家はもっと深いレベルで、つまり単なるプラットフォームの問題ではなく、コンセプトの問題、あるいは感覚や論理の問題として、ダンスと新メディアの変容を取り込むべきだと思っている」

プリオヴィルはゲーマーでもあるらしく、ビデオゲームの世界と関わりが深い。毎年ドイツで開催される先端的なゲームのフェスティバル「Next Level」の常連作家で、今作『RENDEZ-VOUS』も2018年に出品された。現実そっくりに再現された市街地の中を自由に動き回れる一人称視点の犯罪アクションゲーム『グランド・セフト・オート』（最新作は今年5月時点で1億3500万本もの売上を誇る）がモチーフのソロ・ダンス作品『Jailbreak Mind』は、2011年に横浜でも上演されたので知っている人も多いだろう。

「『グランド・セフト・オート』はストーリーをなぞる必要もなく、丸ごと一つの世界の中で好きなことができる。いわば実際の世界の外へ出て、普段はできないことができるんだ。ビルの上へ登って飛び降りるのを何度も何度も繰り返すとかね（笑）。このゲームの中で主人公が死ぬ瞬間、スローモーションになってフワフワと宙に舞う感じになるんだけど、この場面を何時間も録画し、編集してダンスを作って、それを自分の体で練習し、舞台で踊れるようにしたんだ。髪を刈り込んで自分をゲームの主人公とそっくりにして。つまりまずキャラクターに振付をしてから、それを自分の体に移したわけだ。ゲームの中の街で、どんなロケーションがいいか考える必要もあったから、自分にとってそれはもはや一つの現実だった。結果的に、ビデオゲームの世界が上演空間になり、舞台はデジタル空間になって、相互に融合してしまった」

ダンサーでありゲーマーでもあるという人にはあまり出会わない気がするが、プリオヴィルは自分の体で動くのも、仮想の体を動かすのも同じように楽しめるらしい。

「劇場の観客はゲームなんてやらないから、何のゲームを使っているのかもわからなかったみたいだ。ところがこれを「Next Level」に持って行くと、誰もが元ネタは知っているけど今度はコンテンポラリーダンスの表現がさっぱりわからないという（笑）。ゲーマーであり振付家でもある自分にとって、二つの世界に同時に、可能な限り接近しようとする試みだった。一見、双方はかけ離れているけど、合体させたらどうなるか、どうやったら振付できるかを考えたんだ」

日常的にZOOMを使って人とコミュニケートすることが増えた現在、バーチャルとリアルの違いはますます曖昧になっている。ちなみに筆者は数年前、ビデオ通話をしている相手に「一時停止」されそうになったことがある。画面をタッチしてもこちらの話が止まらないので錯覚に気付いたらしい。

✦

VRと現実の境界をかき乱しながら、「誰かと会うこと」「孤独に過ごすこと」に焦点をあてるプリオヴィルの『RENDEZ-VOUS』は、コロナ禍のずっと前に構想されたものでありながら、奇しくも現在の状況に生々しく応答する作品になった。

「パフォーマンスはまさに自分の目の前で起きるから、ライブそのものの感覚だと思う。しかも何か虚構の空間へ連れて行くわけでもなければ、視覚的な演出もない。今まで見ていたのと同じ現実のその場所に、ダンサーが飛び込んでくる。でも実際には誰もいないから、ソーシャル・ディスタンスの点は心配ない（笑）。観客も自分一人だし」

上演の当日の現場には、プリオヴィルもダンサーたちもいない。だからこれを「パフォーマンス」と呼ぶのもどこか奇妙だ。誰がパフォーマンスするのだろうか。パフォーマンスするのは観客の方かも知れない。

「この作品は観客の中に、その場所についてのデジタルな痕跡を残すというか、デジタルな記憶を受け渡すことになる。観客はその場所にやって来て、上演はそこで起きる。確かに何かを見る。けれども本当にそれは起きたのか、どのような意味で“起きた”というべきなのか。ヘッドセットを外して周りを見回すと、自分一人だ。それでもある種の感情が生まれ、その場所に関する記憶も生まれるだろう」

Photo: 阿部章仁

ファビアン・プリオヴィル

アンジェ国立振付センター卒業。ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップスなどを経て、1999年ピナ・バウシュ率いるヴッパタール舞踊団に参加。退団後は振付家としても活動し、2010年ドイツ、デュッセルドルフを拠点に、自身のダンス・カンパニーを設立、パフォーミングアーツとマルチメディアを往還する作品づくりを続けている。
日本での主な公演に、ファビアン プリオヴィル＆バレエノア『紙ひこうき』(08)、「あうるすぽっと×fabien prioville dance company × An Creative　国際共同制作SOMAプロジェクト」(15)、瀬山亜津咲・ファビアン プリオヴィル振付作品『VENUS』（ダンスセッション2017）、演劇集団円『DOUBLE TOMORROW』(17)など。

ファビアン・プリオヴィル・ダンス・カンパニー

2010年にドイツ、デュッセルドルフでファビアン・プリオヴィルが設立したダンスカンパニー。これまで10以上の作品を発表し、『Jailbreak Mind』（共同製作: tanzhausNRW, TrafóBudapest）(09)は、「Tanz plattform」にも招待された。『Experiment on ChattingBodies』(12)では観客がスカイプ経由でパフォーマンスに参加、また『the smartphone project』(13)ではスマートフォンアプリとダンスを連動させるなど、近年はテクノロジーと身体性を主軸とした作品制作を行っている。本作は、これまでに5つのフェスティバルに招聘され、それぞれの空間を活かしたバージョンが発表されている。